



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

いのちを選べ 命の福音・教会の教え

長崎大司教・島本 要

神がイエス・キリストを通して世にもたらされた福音は命に関する福音です。「いのちを選べ。そうすれば、あなたもあなたの子孫も生きるだろう。」(申三十：19)と、モーセを通して人類に語られた神は、ご自分の御独子を、いのちの言葉」として世に派遣されました。人となられた「いのちの言葉」イエス・キリストは、わたしは命である」と宣言され、「わたしは来たのは羊が命を受けられるため、しかも豊かに受けるためである」(ヨハネ十：10)と、ご自分の受肉の目的を伝えられました。そこで、死者を生きかえらせ、大勢の病者、障害者を癒して、「ご自分が「いのちの言葉」であること、また、人間に対する神の思いが

死ではなく命であること を証明されました。この「命の福音」をとりまく今日の状況は、命に対して決して好意的とは言えません。否むしろ、「命に対する脅威」と言った方がより適確な表現でしょう。事実、多くの国で墮胎、安楽死が立法化され、社会的に容認されるような文化的環境を造り出しているからです。このような命に対する今日的脅威に抗して、人間の命の神聖さと不可侵性を、神の名によって再確認し、人類社会を死の文明から救うために、ヨハネ・パウロ二世教皇は、「命の福音」と題した回勅を、教皇の不可謬権を発動して公表されました。

老人の命を奪う人たちに向かって、神がかつてアベルを殺したカインに発せられた言葉を引用して呼びかけています。「何と云うことをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かつて呼んでい

る。」(創四：10)と。カインのアベル殺しは兄弟殺しでした。墮胎は親がわが子を殺す恐ろしい罪です。墮胎は受胎から出産にいたるまでの、存在の初めにある人間を、どのような方法を使うにせよ、直接意図的に殺すことです。胎児は弱く無防備のいのちです。だから最も安全な場所として母の胎内を神はお選びになり、そこに命の萌芽を委ねられたのです。ところがその母親が胎児の命を無にする行為をするのです。ここに墮胎の恐ろ

しさがあ

しさがあ

われる殺害行為だからです。

今日、墮胎を容認する法律を制定した国がありません。しかし、これは立法権の悪用であって、良心を拘束する力はありません。国の立法権は個人と団体の生来的諸権利を承認し、保護・発展させるために行使されるべきであって、人間の諸権利の中で最も基本的な権利である「生きる権利」を侵害する法律は悪用でしかありません。法律は道徳律に根ざしていて初めて拘束力のある法となるのです。

わたしたちキリスト者は「命の福音」を信じています。その信仰によって、「命の民」となりました。神はわたしたちを「命の福音」の宣教師として派遣されました。命の神聖さを宣べ伝え、命に仕える者となるためです。いつでもどこでも、いのちを選びましょう。

平成7年度母子保健家族計画全国大会に参加して

楠本貞愛（滋賀県教育委員会 家庭教育推進委員）

11月28日、29日の両日、

滋賀県の大津市民会館で表記の全国大会が行われた。本大会は、厚生省と担当道府県および市、そして恩賜財団母子愛育会、日本家族計画連盟の共同主催で毎年行われているもので、前年は長崎、来年は沖縄へと引き継がれる。奇しくも戦後50年の本大会は、戦争の悲惨を今も担わされている両地に挟まれる形で、琵琶湖を抱え環境問題に特に熱心な滋賀県が担当したことになる。その事も、本大会の質を高めたい一つの要因であろうか。主催者の大会運営への熱意と誠意は、今の時代を何とかせねばという危機感のこもる、誠に熱いものであったと私には感じられた。

本大会のテーマは、「未来の子どもへの贈り物」子育て環境づくり。そこでは一貫して「環境」がキーワードに据えられ、「子ども権利」、「女性の権利」をふまえた「子育て支援のあり方」が探られていった。いよいよ子育てが、母親だけで負担するものではなく、社会で支えるべきものとして具体的に見直されつつあることを実感でき、働く母親の立場でシンポシストとして参加した私にとっては大変興味深く、考えさせられることの多い大会であった。

母親達の多くは、「1.5」ショックといわれている事態を、当然の成り行きと感じているだろう。「母原病」という名の母親いじめが、終わると今度は、「少子化の女性の社会進出に伴う教育力の低下」という警告が幅をきかすようになり、子育てに翻弄されて反論の力もない未熟な母親達が、今や教育のプロ達から「教育の荒廃の主犯者」として指さされかねない勢いだ。昔も今も初めての子育てというのはどんな母親にとっても不慣れで危なっかしいものであっただろうに、初産婦でさえ体力の回復も待たずして「この頃の母親は、育児が全然出来ない」などと、とんでもない非難を浴びせられる。（初めてのことはわからなくて当然なのに。）つまり、無理解な、およそ優しいさのかけらもない状態で母親達の多くは放置され、孤独な子育てをさせられてきたのである。

しかもその母親達というのは経済至上主義に社会が狂う中で育った時代の産物のような女性達である。言ってみれば、母親や家庭だけが変質したのではなく、そこに現代社会のすべてが投影され、その結果が当たり前に表示されているだけの事なのである。やはり、この責任は社会にも返されて当然であろう。さて、大会最終日には、樋口恵子氏による、「リプロダクティブヘルス、女性の健康」をテーマにした特別講演と、それを受ける形で午後から、十代の妊娠をめぐって」という研究集會が行われたが、これについては、いささか時代的に過ぎるのではとの不安を感じたのでその事について申し述べたい。

樋口氏は、「生殖と生に関する権利と健康」について、94年の国際人口開発会議行動計画（カイロ文書）7章を引用し、「人々に安

全で満足のいく性生活と、生殖能力を保ちつつ、子どもを産むか産まないかを決める自由「が与えられねばならないことや、カトリック国アイルランドをのぞきほとんどの先進国の女性が中絶の権利を獲得し、こうして「中絶の自由化が宗教から自立したことは今世紀後半の大宗改革に匹敵する快挙である」と女性の権利獲得運動の歴史を感無量で語られた。但し、中絶の権利が、日本ではあくまでも優生保護法という障害者差別につながりかねない法的下で運用されており、家族計画の手段としては禁じられていることを付け足されはしたが、「身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあることを健康と定義する」こと（カイロ文書）、優生保護法のもとでも母親の「健康」を維持する手段として中絶は許されていること、但し、

妊娠22週までしか中絶は認められていないため、妊娠週かの計算方法を女性が知っていないければとんでもない不幸な中絶で、きずに産まねばならない）ことになるので性教育で特に妊娠週数の計算法をしつかりと教えねばならないと、力説された。それを受けて午後からの「十代の妊娠をめぐる」の研究集会では、性的に成熟した十代の若者達が、結婚年齢が上がったために動物としてみれば不自然に生殖活動を制御されている状況下で、どのような教育とケアが必要とされているのかが討議された。そこで若者の性教育に熱心な産婦人科医から多くの例がユーモアをまじえ雄弁に語られ、女性より早く完成する男性の性について女性が理解を深め、少女たちの明るい笑顔を奪わないためには、「頭

の先から足の先までやりにたくてしかたない男性に對して、女性の方が「やりたくて仕方がない」のでないのなら、「ノー」と言える勇氣を持つよう、女の子に徹底させねばならないとのことであつた。また、性教育の重要さと共に、既婚女性の四人に一人が中絶をしている実態をひきあいに、十代の若者にも性を楽しむことが認められ、その結果の不幸な中絶や不幸な出産に対しても理解されねばならないと、暗に示唆されていた。私は、これらのことには、本大会のテーマ「未来の子どもへの贈り物」にはそぐわない、現代人のエゴが反映されているようで、どうにもしっくりこないものを感じた。

女性の権利運動が、すべての人間の人權運動へとつながる大きな力となることは素晴らしいと思うが、さて、未来の命に対する責任についてはどうだろうか。胎児という人間の生きる権利についてはどうだろうか。妊娠22週までの中絶の認可は、胎児が母胎から出て生存できるかどうかで定められている。22週といえば、身長30センチの完全な人間である。たとえ、月満ちて生まれた子ども、放置されて生きられる人間は一人もいない。体の中での世話を放棄されるか体の外での世話を放棄されるかは、小さな命にとってはどちらも同じ意味を持つ重大なことである。どんなに小さな人間であらうと、その命を葬らねば守れない権利というものが他にあってよいのだろうか。

また、男性は「やりたくて仕方がない」のが本来で、女性が主体性を持つてわが身を守るべきという産婦人科医の、男ならではの意見にも不消化なものを感じる。もちろんこれは年頃の女の子には効果のある教育的アドバイスではあるが、では、年頃の男の子には、せいぜい「コンドームを持ったかどうか声をかけろ」というのであろうか。これはぜひいぶん男に甘い荒っぽい言い分である。人間も動物であるというのなら、性を子産み子育ての責任と分けず、全うする彼らの美しい命に敬意を込めて、人間も動物だ」と名乗らせていたたくべきであらう。親としてわが子には、欲望のコントロールと自分のやったことに対して責任を持たせること」を徹底させたい。性教育は、命の教育であつてほしい。相手および相手を生み出した命、そして相手によって生み出される可能性のある新しい今への配慮を徹底させ、己の欲望によってだれも踏みつけにしてはならないという人權教育を徹底させてほしい。

現代人は、欲望に歯止め

をかけることを「抑圧」と
マイナスに捉えてホンの
数十年の間に人間のすべ
ての欲望を解禁にしてし
まった。そして自らを先進
国と称する不遜な国の人
間たちが、戦争を引き起こ
し、核の脅威を作り、環境
を破壊して、果ては今生き

ている人間の利益だけを
中心に人の命も地球の命
も左右するようになった。
環境の問題、戦争責任の問
題、そして性とそこに発生
する命の問題……。現代社
会の危機的状況は、すべか
らく少数の人間の抑制不
能となったどん欲さと、そ
の結果に対する責任能力
のなさに起因しているの
ではないだろうか。

13人の子を産み、11人を
この世に遺した与謝野晶
子は、「カナリヤの雛かう
よりはわが子をかわん。カ
ナリアの雛のうぶ毛はみ
すばらし。たらいの中で湯
浴みする白さわが子の肉
づきは母の心をひきたた

す……。」と歌った。カナリ
アの雛を飼うゆとりとい
う「精神的、社会的健康」
を犠牲にしても、我が子を
養う労苦を甘受し、彼女は
自分の心を引き立たせる
ための数多くの詩を己の
ために詠んだことである
う。

今世紀末の大宗教改革
(?)の原動力となった
ボーヴォアール女史が危
険を賭けして自らの中絶
経験を発表し、女性の解放
と権利獲得に貢献したと
評価される(樋口恵子氏
談)のであれば、与謝野晶
子は、母として、人間とし
ての女性の偉大さを自ら
の命と生涯をかけて表現
した人として、もっと高く
評価されて良いのではな
いだろうか。晶子に対する
感動と尊敬の念を、私は
ボーヴォアール女史の生
き方に対しては抱くこと
は出来ない。女性が、授
かった命に対する産む性
の責任を全うすべき事は、

人間の尊厳に関わる重大
事である。そこを支え得る
社会のありようこそが、
もつともつと深く探られ
なければならぬのだと
私は思う。

子育ての大変さを通し
て私がつくづく感じるこ
とは、古い細胞が新しい細
胞に入れ替わらねば生命
の健康を保つことが出来
ないということである。人
間としての美しい命のあ
り方を追求するなら、生殖
能力を備えた大人は、自ら
を、完成し古くなりつつあ
る細胞」と認識し、次なる
新しい命におのが命を
譲っていくことを真剣に
考えるべきなのではない
だろうか。

来年度の沖縄での大会
が、犠牲にされる側の命の
論理に思いを寄せ、母子
保健家族計画全国大会」と
なり、命の倫理に立脚した
家族のあり方を深く掘り
下げる場となつてほしい
と願っている。未来の母と

なるべき少女の命の価値
は不信を前提にした仮想
の脅威に備える基地より
もはるかに大きいという
ことを、そして、「人を傷
つける側になつては眠る
ことが出来ない」という沖
縄の高度な精神文化とを
日本全土に発信し、ずるく
ない大人の姿を青少年達
に示すことで彼らの未来
に希望の灯をともしてほ
しいと思う。



北京会議開催にあたって

マザー・テレサ女史からのメッセージ

北京での第四回世界女性会議に、こうして皆さんが出席できたことを心から神に感謝いたします。本会議を通じて、神が我々女性に与えて下さった特別な役割を理解し、賛同し、大切にし、皆さんの実生活で神の計画を實踐して下さい。

きて私にできないことでもあります。でも皆で力を合わせれば、神の御心に沿う素晴らしいことができるはずです。男女の違いにも同じことが言えるのではないのでしょうか。

神が人間を創造したのは、愛し愛されるという目的のためです。けれど、なぜ半分ほどを男に、それ以外を女にしたのでしょうか？きつと、女性の愛は神が理想とするひとつの形で、男性の愛はもうひとつの形なのです。どちらも目的は同じですが、表現方法が異なります。男女が一緒になつて完全になり、片方だけにいるよりも強い力を発揮でき神の愛を再現できるのです。

最近、女も男も全く一緒だという主張を見受けませんが、私はどうも納得できません。男性と女性の素晴らしい違いを否定してしまつたなんて。神から与えられた資質は全て同一ではありません。私がしているように、貧しい人々に手をさしのべたいがどうしたらいいかと聞かれたら、いつもこう答えます。「私にできてあなたにできないこともあれば、あなたに

女性のみが持つ特別な愛の力は、その人が母に

なつた時、最も顕著に現れます。神より女性に与えられた贈り物は「母性」です。世の中に、女性自身に、そして男性にとつてもこれほど喜ばしいことはありません。そんな贈り物を与えられたことに、どんなに感謝しても足りないほどです。けれど私達は、中絶という悪しき行為によつて、また愛情や献身よりも仕事や地位向上を優先し、母性という宝を台なしにしています。どんな仕事や計画や財産や「自由」という名の身勝手も、愛にはかかりません。神が下さった母性にそむくのは、女性に与えられた最も大切な愛する力を捨ててしまつてことです。

「汝を愛するように汝の隣人を愛せよ」と神はおっしゃっています。まずは自分自身を愛し、それから周囲の人にも愛情を分けてあげたいと思つたのです。自分が神の創造物であると認めなければ、どうして自分のことを愛せるでしょう？男女の美しき違いを否定するのは、人間が神の手による作品ではないと見なすことです。隣人だつて愛せるわけがありません。世界が分断され不幸になり、平和崩壊を望んでいるようなものです。例えば、繰り返し申し上げますが、現代社会においては、中絶が最大の平和崩壊因子であり、男女が何もかも一緒であるべきという考えは、中絶への賛同にながめるのです。

死や悲しみではなく、平和と喜びを世界に広げましょう。そのためには神から平和という宝物を分けてもらい、神の子としてみんなが兄弟姉妹のように、愛情をもって他人を受け入れなくてはなりません。子どもにとつては家庭こそが愛と祈りを学ぶ最高の場所です。父母の愛と祈りがお手本になります。バラバラで結び付きの弱い家庭の子どもは、愛や祈りを知らずに育ちます。崩壊した家庭の多い国では、さまざまな問題が起こるでしょう。特に豊かな国では、愛に飢えた子どもが疎外感を紛らすため、麻薬などの誘惑に手を出すようになってしまっています。

しかし、家族がしっかり結ばれていれば、子どもは両親の愛を通じて神の愛を見いだし、大人になつてから自分達の国を愛に満ちた平和な場所にしようとなつていきます。神からの最高の賜物である子どもには、母親と父親の両方が必要です。どちらもそれぞれで神の愛を示しています。共に祈る家庭は強く結ばれ、神のお手本に従つて互いに愛し合う

でしょう。愛の力は常に平和をもたらしめます。

ですから皆さん、いつも心に愛を持ち、喜びを出会うすべての人と分かち合いましょ。今日ここに集まりの方々、そして本会議で手をさしのべようとしている人々、皆さんが聖母マリアのように清らかでつつましく、愛と平和の中で暮らし、家庭と世界を美しい神の国としていけるよう、祈りつつ。

性の道しるべなく戸惑う恋人達

クリスチャンにとつて

の心配事は、避妊の手段として精管切除と卵管結紮をする仲間が増えてきている事だ。それが子ども達にまで影響を及ぼしているらしい。十代の子どもを二人持つ家庭では、両親が貞節と禁欲を教えようとしても無理がある。教会では若者だけの集まりもあるが、貞節や罪を不浄と関連づけて教えていない。私達の望む方向に話題が進むと、子どもが聞くべき内容じゃないとリーダーはかたづけしてしまう。性行為に関する「説話」は子ども達向きではないとされている。大学二年になる長女は、高校の同級生で処女は三人だけだ(62人中)と言う。仲のいい三人の友達もクリスチャンだが恋人とベッドインしているそう

だ。

なぜ教会は婚前行為について若者に問いかけないのだろう。夫と私は結婚するまで肉体関係を持たず、途中つらいと思いがながらも、二年間つき合ってきた。その結果どんなに結婚生活が豊かなものになったことか。子ども達にも第三者が語りかけてほしい。教会の主任にはがっかりさせられたし、時代遅れの感が強い。では、私達にできることは？子ども達はテレビ、映画、雑誌等から性の情報を与えられ続け、教会さえも婚前行為を否定しないとすれば、私達は何を期待できるだろうか？

CCL family foundations

11-12/92pp18

変化する為の

神からの使徒

我々、キリスト教徒としての人生の最終目的は、神のようになる事である、と誰でも知っている。それはキリスト教徒として成熟する事であり、「満ち満ちるキリストの背丈にまで至る完全な人間を作るためである。」(エフェソ人への手紙4章13節)

この様な成長は、教会が「神聖化の成長」と呼ぶ、段階的な過程である。そしてキリストの使徒パウロが、コリント人への第二の手紙3章18節で言う様に、主は我々が主と同じ姿になる様に、我々を変えて下さるのである。しかし神はどのようにして私達を変化させるのだろうか？それは神の「恩恵」によるのもちろんであるが、でも私はそれだけではなく、時に

は小さな子ども達を、私達を変化させるために使われると思うのである。

変化させる為の使者

確かに子ども達は私たちの生活に変化をもたらす。彼等は私達のスケジュールをみだし、眠りを妨げ、私達の優先するものや視点や人生観を変えてしまふ。でも同時に彼等は素晴らしい贈り物をもたらしてくれるではないか？彼等の目を通して、新鮮な世界を見るチャンスを得たり、自分達の幼い頃を思い出させてくれたり、私達より長生きするであろう彼等の人生を通じて未来とつながってくれたり。創世の書の1章28節で述べている様に、彼等は神による特別な祝福の賜物なのである。

神から送られた使者

しかし私達の子ども達は、我々をイエス様に似る様に变化させる為の使者でもある。彼等は私達にキリスト教徒としての謙遜を教えてくれる。私達はこの新しい人間である子ども達を、どの様に形成し、教育していくかわからないう事が多いし、この社会や世界すべてについてはなおさらである。私達は常に穏やかではいられないし、常に自己制御は出来ないし、常に楽しくしてられない。私達は怒るし、疲れるし、他の人々の力を必要とする。私達はどう見ても自分をコントロール出来ないし、完璧ではないのである。

神から送られた教師

許しとは何かを私達に

教える為に、神は実によく小さな子ども達をお使いになる。私達が子どもを怒鳴ったり、叩いたりするのは時には、その子どもが特に悪かったからではなく、私達が疲れていたり、ひどい一日を過ごしたからであつたりする。そしてそこで何が起ころうだろうか？二分後にはその子は私達に抱きついてこう言うだろう、「ママ大好き」。そこで突然私達は自分が許された事に気が付くのである。私達のした事を責められず、新しい気持ちにさせてくれる。イエス様のお許しがいつも私達を新しい気持ちにして下さると同じ様に。

そして更に、自分は、自分が思っているより良い人間である事に気付かされ、驚かされる。子どもの為なら、物質的なものやそれまで執着していた自分の計画はあきらめられる事を、神は示して下さる。嘔吐している幼児の看病で徹夜出来る事も、神は証明されている。子どもがまったく言う事を聞かないとしても、それでも愛せる事を、神は教えて下さる。そして私達が何の見返りも期待せずに、子ども達の成長と素晴らしい業績を見る事を、許されているのである。神は私達に与えて下さった子ども達によって、精神的愛やキリストの様な愛を表現する為の練習をさせて下さっているのである、その様な練習をさせる事によって、神は私達を更に更に彼に近づける。神が下さった子どもを

望まないという事は、神が私達に働きかけたかと思つていらつしやる素晴らしい変化が得られなくなつてしまふ事である。中は子どもが殺されるだけでなく、我々の人生への神の計画、「徐々に栄光から栄光へと」（コリント人への第二の手紙3章18節）キリストに似る様に我々を変化させる神の計画まで滞らせるのである。

長老派教会の中絶反対
ニュース、1995

3月

Pro Life Hero

看護学生の頃、産婦人科病院で働いた。上からの命令、仕事の一つという感じで罪意識もなく、中絶の手伝いをした事があり、もっと早くにプロ・ライフの事を知っていたならば、過去を悔やまれる林なおみさんは今、足利市に住んで、三月には三人目の子どもさんに恵まれる。

毎月ニュースを15部購入して下さり、教会に来ている青年達に是非読んで下さい」と言つて渡したり、知らない独身の方が住んでいそうなアパートのポストにどんどん入れたり、通りすがりの産婦人科病院のポストに入れたり、受付の人に「ドクター、ナース、患者さんに読んでもらつて下さい」と渡して下さっています。

ラジオ、新聞、雑誌の人生相談、命の電話の先生方さえ、中絶は仕方ない「中絶はやむを得ない」と返事している事は悲しい事です。間違つたアドバイスは殺人の手伝いをしているようなものだから、アドバイスする方々も胎児を守るようになって欲しい。

ある時、小さな産婦人科病院の看護婦さんに渡すと、「そんなもの受け取れません」と拒否反応にあつたけれど、たびたび行くところ「じゃあ」ととりあえず受け取ってくれた。ニュースを渡す時は勇気がいるけれど、神様の喜んで下さる仕事、一人でも事の重大さに気づいて欲しいと思つて活動して下さつています。拒否されても、「この人が変わっていけば……」と祈りつつ、希望もあるのよとおっしゃられる。

(大岡滋子)

性

「貞潔の習慣の復活」

私達の性への姿勢は習慣的になることがありません。性は神が私達に与えた全く自然なもので、同意するパートナー同士なら誰にでも許されると言う人もいます。しかしそれは厳密には正しいとは言えません。確かに神は私達に強い性的欲望を与えられましたが、だからといってその衝動の全てに忠実に従うべきではないのです。私達には、食べる事、飲む事、眠る事など多くの欲望があり、それらを全て自制心によってコントロールするべきなのです。衝動にコントロールされるのではなく、私達自身がコントロールする運転席に座るには、自制心が必要です。それらの欲望を正しい方向に向

ける良い習慣を身につける事なのです。

1 自制

まず自制とは何か知る必要があります。言っておきますが、ここでいう自制とは、ジャネット・ジャクソンの歌に出てくる、私はもう大人だし、自分で自分を抑えられるわ」という意味ではありません。むしろ「主よ、私が成長できるように自制心をお教え下さい」という歌にあるような意味です。性欲をコントロールする術を学べば、人生の他の分野でも役立ちます。なぜなら、それが私達の心と理性を成長させるからです。心(または理性)が身体をコントロールしていれば、私達は長期的観点から人生に有益な選択をして、成長し、成熟できます。しかし、逆に身体が心をコントロールして

いる場合、子どものように将来への何の考えもなしに、目前の欲望を満たす事を選んでしまいます。真の大人へと成長できず、人生の全ての局面に自己中心的で利己的な人間となります。私達はまず心と理性で愛することを学ぶべきであり、その後(結婚した後で)身体で愛することを学ぶのです。

2 貞潔

そこで、より責任感と自制心を持つために、貞潔であらねばなりません。貞潔とは何でしょうか? 簡単に言えば、それは性的な自制心です。結婚までセックスをせず、結婚後も配偶者に対して誠実でいる事です。結婚前に貞潔であった人は、統計上、より幸せな結婚生活を送っているという研究結果が出ています。それはつまり、結婚前

に貞潔であった人には、結婚生活で離婚や性的虐待、不倫などのケースが少ないという事です。なぜでしょう? それは、結婚前に、性的な自制を学んだ者は、結婚生活でもそれを実行できるからです。そして、この健やかな習慣が幸せな結婚生活を築いていくのです。

3 信仰心

神の教えに従って、健やかな性的習慣を身につけて下さい。それには勇氣も意志の力も要りますが、何より神の恵みが必要でしょう。結婚前のセックスに「ノー」と言うには決断力が必要であり、また何かあるうとそれを守ろうとする信仰心が必要です。「実に神のみ旨はあなたたちが聖となることにある。淫行を避け、おのおのが器を神聖に尊く保ち、」テサ

口二ヶ人への第一の手紙
：4章3節～4節】という
聖パウロの言葉を常に忘
れずにいましょう。中世の
時代には、恋人への貞潔の
証として女性がよく貞操
帯を身につけていました。
しかし今日では、私達は貞
操帯をつけることではな
く、貞潔な生活を送るよう
常に努力するという健やか
かな習慣を形成する事で、
自分達の貞潔を宣言する
のです。

YOU mag 11-12/94pp21